

対策を検討する研究の予備調査として、記入法による生活実態調査を行った。

2. 対象は仙台市の中心部及び、その周辺部の夫々13校合計26校の女子教員約520人である。調査時期は昭和37年7月中旬で夏休みの前の比較的校務多忙な時期で、家族構成、生活時間、睡眠状態及び疲労の自覚症状等の調査項目について記入法により調査した。

3. (1) 平均年齢は37歳で、平均勤務年数17年で比較的年齢も多く、教師生活も長い。

(2) 既婚者が85%を占め、その約40%が学齢前の乳幼児を持っている。

(3) 家庭の電化は相当よく行われ、家事労働関係の電気器具の使用率は仙台市サラリーマン家庭に比し著しい。

(4) 疲労の自覚症状は、精神的症状を訴える者が最も多く、肉体的疲労よりも精神的疲労が多い事が分る。

㊤C-19 小学校女子教員（特に家庭の主婦である）
の生活疲労に関する研究
(1) 予備調査

東北大川内東分校 佐藤 徳子

1. 小学校教員の約 $\frac{1}{3}$ 以上を占める女子教員の大部分は、30万台の家庭の主婦である。しかも学校に於ては低学年の担任が多く、心身共に相当な労働が考えられ、男子教員に比べ病欠欠勤が多いと言われている。それで女子教員の健康状態を疲労現象を中心として把握し、その